

俳優 石上亮の大好きな宿題
『映画感想文』

第5回 時をかける少女

2010年 5月 7日

最近、東北大学時代の友人のハラデン(仮名)さんと10年ぶりに再会しました。お互いに年を食ったこと以外は何も変わってないねって会話から始まり、話題は大学時代の授業ノートの話へ。在学中、オレは彼に世話になりっぱなしでした。授業をサボる癖がついてしまったオレは、テスト前になるとハラデンさんに授業ノートのコピーをせがむ始末。学年でもトップクラスの頭脳を持つ彼のノートは評判を呼び、いつしかオレは、友人の間で「ハラデンノート」調達係になっていました。

映画『時をかける少女』と聞いて、大林宣彦監督版『時をかける少女』やアニメ版『時をかける少女』など、世代によってそれぞれ違った作品を思い浮かべるんじゃないかなあと思います。映画はタイトルの通り、女の子が時空を飛び越えて過去の世界に行く話なのですが、映画の内容以上に主演の芳山あかり役・仲里依紗さんにオレは首っただけでした。劇中で描かれている彼女は、明るく積極的で笑顔が素敵なんだけど、弱い一面も持ち合わせていて、男性なら守ってあげたいって思わせる女の子です。そんな芳山あかりが、交通事故のせいで昏睡状態になった母・和子の願いを叶えようと、過去にタイム・リープします。お気づきの方もいると思いますが、あかりの母・芳山和子こそ、大林宣彦監督版『時をかける少女』の主人公です。本作を観た後に大林監督版をDVDを借りることで、より一層楽しめちゃうというオマケ付き。70年代にタイム・リープしたあかりが会うのは、学生映画を作っている涼太。映画を観る限り、涼太は授業にほとんど出ずに映画制作にのめり込んでいるのが感じられます。オレもちょうど今、『J・IV・M～a great LOVE～』という長編映画を制作中なので、涼太に感情移入して観ちゃいました。70年代での生活に戸惑いつつも涼太という「人間」と共に、母の願いの為に奔走するあかり。ラストはドラマティックな結末を迎えます。「映画の持つ力」は時が経っても変わらず在り続ける、というメッセージが、『時をかける少女』には込められているような気がしました。

今から約10年前、「ハラデンノート」の助けもあって順当に単位が取れたオレは、めでたく大学を4年で卒業できました。果たしてオレは、授業の単位が取れば結果オーライだったのでしょうか。久々に再会を果たしたハラデンくんは、ノートを貸し出す時に密かに内容を少しいじって渡していた、と告白しました。10年の時を超えて伝わった真実は、今となっては笑いの種ですが、それがオレの人生にどのくらい影響を与えたのでしょうか。それを知りたかったら時をかければ良いんですかね。じゃあ、知ることが正しいことなのか。映画『時をかける少女』は、それを教えてくれますよ。少なくとも「ハラデンノートの持つ力」は、今のオレが存在するには必要不可欠な要素です。